

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530845

研究課題名(和文) 教職大学院で学部卒業者が獲得すべき教師スキルの解明とそのルーブリックの作成

研究課題名(英文) An Elucidation of Teaching Skills for the University Graduates in Program for Leadership in Education, Professional Degree Course, and the Development of Rubrics

研究代表者

山口 陽弘 (Yamaguchi, Akihiro)

群馬大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80302446

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)： 本学教職大学院において成績優秀者として選出された者を追跡し、インタビュー調査を行った。ストレートマスターを中心に調査する予定であったが、研究を開始すると、現職教員も含めて調査した方が目標(ルーブリック)設定のためには有効であることがわかったため、現職教員も含めて修了生調査を行った。その結果、修了時での成績優秀者が現在、勤務校でも活躍されている点が、管理職などからの聞き取りからも十分うかがえた。成績優秀者に共通してみられる特徴は、入学時での目標設定が高くレディネスが高かった点、入学後に同級生との交流を十分に行い、各種の発表会の際に、他の発表を十分咀嚼していた点が顕著な傾向としてみられた。

研究成果の概要(英文)： Teaching in graduate school, to track the person who is elected as the top performer, followed by interviews. The study initially was scheduled to investigate around a straight master. However, since that person who you start the study, we investigated, including teachers, is effective for the rubric setting has been found, is not limited to straight master, including teachers, and carried out the alumni survey were. As a result, the point at which current, high achiever in at the time of completion is also active in the school work, was Ukagaemasu well from interviews with the principal. That goal setting in the graduate school of teacher education at the time of admission is high, ie, features found in common to them is that readiness was high.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教職大学院 ルーブリック 認知的徒弟制度 統計リテラシー 教師スキル インタビュー調査

## 1. 研究開始当初の背景

(1)教職大学院に関しては、教員の資質向上のための喫緊の課題として、本学、群馬大学教育学研究科でもH20年度に設置された。これまでの日本では存在しなかった教員養成のための別体系の教育組織でもあり、諸外国に先行例はあるものの、実証的な教育心理学的知見としては直接的には存在しなかった。

(2)こうした新領域の効果検証に応用心理学的研究が役立つと考えた。具体的には、社会心理学や臨床心理学等でしばしば指摘される社会的なスキルや授業場面で活用されているコミュニケーションスキルの養成に視点を置いた上で、教職大学院で行われるカリキュラムの効果検証をしていくことだろう。

(3)教職大学院は、H23年現在全国で二十校以上が存在しているが、そもそも教職大学院で院生が学ぶメリットについては設置当初から疑問視されてきた。ストレートマスターに限定しても、大学院修了者に対して採用時にアドバンテージを与える都道府県の方が少数派である。採用の問題を置いても、実際に院生が二年間で教員としての力量をつけたことを示す、具体的エビデンスを示すことは、勤務校としても急務であるし、全国の教職大学院にとっても効果検証手法の確立は不可欠である。

(4)教職大学院の意義を明確化・具体化することが本研究の課題であるが、特に今回の研究では教職大学院においてどのような教師スキルが獲得されていくかを、言語的のみならず、非言語的コミュニケーション能力も踏まえた上で、実証的に測定していくことが必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

(1)教職大学院という組織が有効に機能していることを検証するエビデンスを示した研究は数少ない。教職大学院の有効性が何であるのかを、そのカリキュラム面からみても、個別の事例としても研究していく必要がある。

本研究では、特に学部卒業者(ストレートマスター)に焦点を当てて、本学の教職大学院に入学直後から修了後に繋がる縦断的な追跡調査をしていき、そこで獲得されていく教師スキルの変容過程を明らかにしていくことを研究の主目的とした。また、同時に本研究では、それを現職教員への指導、カリキュラムとも比較して、教職大学院の持つ教育効果を実証的に検証することが目的である。

(2)しかし、ストレートマスターだけで教師スキルの変容を捉えていくのは研究の広がりという面から見て狭く、実際の教職大学院には現職教員が多く在籍して共に学んでいるため、現職教員の持っている教師スキルに関

しても調査する。これは実際に研究を進めて行くに当たって、本学大学院への入学者に占めるストレートマスターの割合がH25年まででも少数派であったという現実の問題もあったため、ストレートマスターだけではなく、現職教員も含めた調査になっていった。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、修了生・在学生への質問紙によるアンケート調査を実施すると同時に、インタビュー調査を併用することを行った。特に、すでに現場で勤務している修了生に直接訪問し、インタビュー調査を実施するという追跡調査を行った。

## 4. 研究成果

(1)研究当初は、それ以前の過去三年間なされてきた各種の教育評価活動を整理しなおした。具体的には以下の から を検討した。

### 各教員の教育評価、授業検討会の再検討

すでに現時点で勤務校の教職大学院において教員各自が、院生に対してきめ細かな教育評価活動を行っている。これらをさらに集約して各種評価業務を行っているのが教職大学院評価部会であり、研究代表者がそのまま評価部会の構成員である。すでに二年間にわたり大学院内で授業検討会(毎年学年末に実施)を行い、お互いの教育評価活動に共通のコンセンサスを得ようとしているが、この授業検討会から、各教員がどのような観点で院生を評価しているかを再整理した。

### 各教員が設定している教育目標の再検討

によってその評価活動を整理した上で、何を各教員が具体的な教育目標として設定しているかを明確化する。その上で、大学院の組織全体としてどのような教育目標としての共通事項があるのか、またなければならぬのかを再検討する。これはループリック制作の基本となった。

過去の院生の自己評価アンケートの再分析、院生の過去の実習録、課題研究報告書の再分析

過去において、院生が自分自身の二年間で得た教師スキルに関しては大学院修了時に、自己評価アンケートを行っている。この結果の再分析を行い、過去に提出された膨大な教育実習録、および課題研究報告書(教職大学院における修士論文にあたるもの)を再分析した。この手法で、院生達がどのようなスキルを身につけていったのかを明らかにした。

教職大学院の修了生に対する訪問・面接調査、現在の授業参観

は主として自己報告的・言語的スキルにほぼ限定されるので、実際に教師スキルとしてどのようなものが身に付いているかを修了生の現在の勤務先に訪問し、面接調査を行

った。

この から までを、分析すべき教職大学院の教育活動データの核とした。それをもとに方針をさらに焦点化し、並行して も実施していった。

入学段階、一年後の段階等での模擬授業の実施、記録

教職大学院入学段階で模擬授業を行わせ、その活動を記録していくことを継続的に行った。

### (2) 修了生調査の分析

現在の勤務校において、教職大学院修了生がどのような活動をしているのかを明らかにし、それを大学院入学生や、学部学生に対しても、同様な分析を継続的に実施した。

こうして得た「獲得されるべき教師スキル」を、教育学的知見からも整理していった。

### (3) 最終的な検討

最終年度において、これまで得られた知見をもとに、教職大学院における効果的な教育評価上のループリックを、より一般に利用可能なものにしていった。

教職大学院における教師スキルループリックの提案

教職大学院の認証評価などにおいて、各種のチェック項目がある。これを院生の立場に立って、実際にどのような力量がついたのかという点に関して、エビデンスたりうる教師スキルの向上について、本学のループリックを検討した。

評価と指導の一体化のための形成的評価の提案

教師スキルループリックは、一回だけで終了するのではなく、本来指導と一体化されることでさらに有効なものとなる。形成的評価へ発展させるために、指導との結びつき、カリキュラムの中に組み入れていった。

現職教員とも統合させた教師スキルループリックの提案

ストレートマスターの教師スキル獲得の過程を明らかにすることで、その情報を現職教員へのカリキュラムの拡充していった。

以上の結果の詳細は、以下に示す著作、発表論文にまとめている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

2014年 山口陽弘・新藤慶 「群馬大学教職大学院の修了生調査からみられる教職大学院の成果と改善点の検討 - 個別インタビュー調査に焦点化して - 」 群馬大学教育実践研究, 第31号, 173-184. 査読有

2014年 山口陽弘・音山若穂 「小中学校教員の抱える問題解決を目的とした統計リテラシー教育の提案 仮説の立て方・考え方に焦点化して 」 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 第63巻, 149-164. 査読有

2014年 音山若穂・山口陽弘 「小中学校教員の抱える問題解決を目的とした統計リテラシー教育の提案 仮説検定と結果のまとめ方 」 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 第63巻, 165-179. 査読有

2014年 山口陽弘・新藤慶 「群馬大学教職大学院の修了生調査からみられる教職大学院の成果と改善点の検討 - 個別インタビュー調査に焦点化して - 」 群馬大学教育実践研究, 第31号, 173-184. 査読有

2013年 山口陽弘 「教育評価におけるループリック作成のためのいくつかのヒントの提案 - パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して - 」 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 第62巻, 157-168. 査読有

2013年 山口陽弘・清水真紀・土方裕子・今井信一 「イメージ教育を受ける日本人中学生の音韻的作動記憶に関する研究 - 非単語復唱能力の観点から - 」 群馬大学教育実践研究, 第30号, 199-210. 査読有

2013年 新藤慶・山口陽弘 「群馬大学教職大学院の修了生調査からみられる教職大学院の成果と改善点の検討」 群馬大学教育実践研究, 第30号, 145-156. 査読有

2012年 高橋美保・山口陽弘 「教員養成課程の学生のキャリア意識の実態とその問題点の検討 - 学部学生の教職に対する素朴概念を中心に - 」 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 第61巻, 209-218. 査読有

2012年 山口陽弘・石川克博 「教育評価の理論と実践 - 真正の評価をめざして - 」 群馬大学教育実践研究, 第29号, 187-200. 査読有

2012年 石川直紀・山口陽弘・石川克博 「中学校理科における科学的思考力を高める指導法 - 仮説評価スキーマ学習を用いて、結果と考察を分けて記述することに着目し

て - 」 群馬大学教育実践研究, 第 29  
号,211-217. 査読有

2012 年 日部貴博・山口陽弘・石川克博  
「わかる授業により児童の学習意欲を高め  
る社会科学習指導 授業間のつながりに着  
目した振り返り活動の工夫を通して 」  
群馬大学教育実践研究, 第 29 号,201-210. 査  
読有

〔図書〕(計 2 件)

山口 陽弘 他、一藝社、教育方法論、  
2014、79-91

山口 陽弘 他、北大路書房、  
学習の支援と教育評価、2013、  
247-249.255-269.278-282.286-293

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山口 陽弘 (YAMAGUCHI, Akihiro)  
群馬大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 80302446